

## キリストの謙卑を思いつつ生きる

フィリピ2章1～11節  
2022年10月30日  
松田 基子 師

わたし達は今朝もイエス・キリストを、私の救い主、わたしの生も死も全存在を委ねる主と信じ告白して、父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊の三位一体である神様を礼拝する為に教会に集まってきました。わたし達が日頃、教会と言うと、この会堂、建物を指して教会と呼んでいますが、厳密には、これは教会堂であり、**そこに集まっているわたし達、信仰共同体を教会と言います。**

その教会はイエス・キリストが地上に残された体であり、救いの門、天国への門です。何故かと言いますと、人間は自分に命と使命を与えて、世に送り出して下さった神様に従うことなく、自分の考えを正しいとして、**自己中心、人間中心の世界を築いてきました。**それが如何に神様に対する罪であるか、人間自身は分からず、人類は歴史を重ねれば重ねるほど、罪の枳目を増やして来ました。その行き着く先は永遠の滅びでした。その背後には、**神様に敵対するこの世の勢力があり、人間を常に神様に従わせまいとして、自己中心、人間中心に生きさせようと誘惑し続ける存在**がいます。

聖書はその存在をサタン、悪魔と呼んでいます。その力はとても強く、人間自身の力では、その力に打ち勝つ事は出来ません。神様は、もはや人間自身では罪に打ち勝つ力がないために、人類をこの世の勢力から救いだし、**神様に従う人間に回復させるために、神の独り子を人の子として人間の歴史の中に送られました。**それが神の御子、**イエス・キリスト**です。

神の御子が人類を救うためには人類の罪を

解決しなければなりませんでした。

イエス・キリストは全人類の罪を一身に引き受け、身代わりの十字架に架かり、死んで葬られ、3日目に復活し、天に帰り、神様の右の座に着かれました。ここに神様は、イエス・キリストによる救いの道、天国への門を拓かれました。

そして、このイエス・キリストによる御救いは、**イエス・キリストを信じる信仰共同体である教会に託されました。**

そこに教会は天国への門となりました。しかしながら、神の御子を十字架に着けたほどのこの世の勢力に、キリスト者が自身の力で立ち向かって行く事は出来ません。神様は教会がイエス・キリストの御救いを述べ伝え、キリストの愛を証しして行くために助け導いて下さる聖霊を、イエス様と入れ替わりに、地上に送られました。そこで教会には、天上の頭なるキリストにしっかりと結ばれ、聖霊の支配と導きの下に、この世に対して、イエス・キリストの福音を語っていくと共に、キリストの体として、キリストの愛を現して行く責任があります。

さて、初代教会に於いて使徒パウロは、一途にイエス・キリストによる救いの福音を述べ伝え、多くの方がキリスト者となりました。しかし、彼はそれで良しとしたものではありませんでした。イエス・キリストを信じたキリスト者が教会の一員となり、教会員との関係性によって**キリストの体の一部と言う自覚を持ち、その性質が清められ、この世にイエス・キリストを証しして、世に仕えるキリスト者となり、キリストの愛を広げて行く教会に成長して行く事を願いました。**

パウロはその願いをもって、地中海世界に幾つもの教会を建て上げましたが、パウロが中でも愛した教会がフィリピ教会でした。ところでパウロはイエス・キリストに救われた価値と尊さとを最も良く知る人でした。彼はキリストの心を心とし、

生きるにも死ぬにも、キリストが崇められる事のみを求めました。しかし、イエス・キリストの福音を語れば語る程、敵対者の攻撃迫害に遭い、幾度か投獄されました。

パウロの投獄を我が身の事のように心配して、贈り物を用意し、それをエパフロディトに託してパウロの許に届けたのはフィリピ教会でした。ところが、エパフロディトはパウロの許で病気になってしまいました。パウロもフィリピ教会も心配しましたが、神様の憐れみによって、彼は癒され、フィリピに帰る事になりました。その時パウロはフィリピ教会への感謝と、彼らの信仰生活に対する助言を手紙に記して持たせました。それがフィリピの信徒への手紙です。獄中のパウロは、フィリピ教会の愛に、心から感謝を述べ、また、彼らへのパウロの愛を綴ると共に、信仰の導きを記しています。フィリピ教会は、何か大きな問題や混乱があったわけではありませんが、自分の意見を持った、社会的にしつかりした人が多く、自己を主張し合っていたようです。

そのまま放置する事は、対立や分裂を産む可能性があります。パウロはそこで、教会が交わりの原点に立ち帰るように、2章1節から、  
「あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、」  
と呼び掛けています。フィリピ教会の信徒さんたちは、パウロの伝道によって、イエス・キリストを信じた時、心に大きな喜びが溢れました。イエス・キリストからの大きな励ましに、人生が変わる力を得ました。そこにはまた、神様からの豊かな愛の慰めがあり、心は豊かに満たされました。また、聖霊の豊かな導き、聖霊に支配された交わりに、教会は三位一体の神様の支配を受けて、慈しみと憐れみの心で満ちていました。そんなフィリピ教会に、いつの間にか持論を

主張し合い、自分の正しさを認めさせようと必至になる人たちが現れたのです。

そこでパウロは彼らに、

『あの最初の、キリストの励まし、神様の愛の慰め、“霊”による交わりを思い出させ、その時の心が幾らかでもあるなら、』  
と呼びかけています。しかし、それは彼らを否定しようとしているのではなく、

『あなた方は、決してそれを忘れる筈がない、まだきつとある筈だ』  
との促しです。そこで2節に、  
「同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たして下さい」と懇願しています。

パウロと言えば、論敵に対しては一步も引かず、キリストの真理を理路整然と、大胆に語る姿が想像されます。その姿から、信徒さんたちに対しても、教師として命じる姿を想像するのですが、パウロはここで、心からの愛を以て懇願しています。パウロの信徒さんたちを愛する愛の深さが伺われます。

「同じ思いとなり」  
と言うのは、目的を一つにするという意味です。次の、

「同じ愛を抱き」  
についてですが、一人ひとりに一番必要なものは、何でしょうか。互いは皆、罪の滅びに向かっていた者です。そんな価値なき罪人を、イエス・キリストは愛して、身代わりの十字架に架にかり、救って下さったのです。その愛を受けているのですから、

『互いはその愛に感謝して、キリストに愛されている愛で互いを愛すべきです』  
と言っているのです。

「心を合わせ、思いを一つにする」  
と言うのは、意図を同じくするという意味です。互いがイエス・キリストの御心を求めることで、

その意図を同じくする事が出来ます。

では、それらの事は具体的には、どんな事なのでしょうか。3節に、

**「何事も利己心や虚栄心から  
するのではなく」**

と記されています。利己心とは、自分の利益だけを考えて、他人の立場など考えないことです。信仰的に言えば、

『自分の主張が正しい』  
と言い張ることでしょう。その為に相手を非難して、こき降ろすと言うことが起こりますが、その心理は自分の立場を守らないではおれない利己心と、自分を実力以上に見せようとする虚栄心の現れです。しかし、本人達はそれに気付いていません。そこでパウロは、

**「へりくだって、互いに相手を  
自分よりも優れた者と考え」**

なさいと勧めています。ここでの、優れた者と言う意味は、能力の事ではありません。わたし達は小さい時から比較の中で育って来ましたから、直ぐに能力の比較をしてしまいます。実はその事が、優劣を付けて、互いを傷付け合っているのです。人は皆、誰も神様に創造された**神様の作品**です。神様はその人でなければ、**輝かせないものを全ての人に与えて、世に送り出しておられます**。互いを**神様の作品**として見る時、初めて相手に**尊敬**をもって、自分より**優れた者**と考える事が出来ます。

4節には、

**「めいめい、自分のことだけでなく、  
他人のことにも注意を払いなさい」**

と勧められています。詰まるところ、自分のことしか考えられないところから争いは起こります。人は一人では生きていく事は出来ません。それ以上に、教会はキリストの体として、互いはそれぞれの器官として繋がり、一体となっているのです。そこに立ち帰るなら、**周りに生かされ**

ている自分が見えてきます。そして、周りを大事にするでしょう。教会の一致は、**イエス・キリストに繋がり、イエス・キリストに倣う**ことです。

そのことに気付かせるために6節から、イエス様は、私達の為に何をして下さったかが記されています。6節から11節は、**信仰告白文**とされています。その中で、6節から8節までは、

**「キリストの謙卑<sup>(けんび)</sup>」**

と言われる部分です。謙卑と言うのは、ただの遜り(へりくだり)ではなく、最も底の底まで遜られた、それも、

**「神の御子がそれほどまでになさった」**  
と言う遜りの極みを現しています。

6節に、

**「キリストは、神の身分でありながら、神と  
等しい者であることに固執しようとは思わず、  
かえって自分を無にして、僕の身分になり、  
人間と同じ者になられました」**

とあります。ヨハネ福音書1章1節には、

**「初めに言があった。言は神と共に  
あった、言は神であった」**

と記されています。ここにはイエス・キリストが、神の言として神と共に、世界が創造される前からおられたことが言い表されています。世界が造られる前から、神の御子は父なる神様と心を一つにしておられました。御自分から人類を愛して、神の身分に固執されることなく、神の身分を自分から放棄して、人間の肉体をとり、人の世に生まれてくださいました。

それは、何のためであったかと言いますと、  
フィリピ2章7～8節に、

**「人間の姿で現れ、へりくだって、  
死に至るまで、それも十字架の死に  
至るまで従順でした」**

とあります。イエス様は人の世に生まれて来られましたが、それは人の世の高きに生まれるの

ではなく、人の世の最も低きに生まれて下さいました。それは人類の罪を贖うために、まさしく人類に仕える僕となるために、自ら進んで、低きに降られたのです。神の御子が人となられただけでも、その遜りは大変なものです。ところがイエス様は、人間の、もうこれ以上の底はないという、全人類の罪を負って十字架に架かられたのです。

人間の罪の一番深い底に降って、人間を支え、十字架に架かられました。それはただ、わたし達人類を愛された愛の故でした。それはまた、神様の御心でもありました。9節に、

「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」

とあります。神様は御自身の御心、御計画に、全き従順をもって従われたイエス様を、人類への救いの成就の証として、死人の中から甦らせ、天の高さに引き上げ、全ての名、つまり全ての存在の上に置かれました。

『それは天上、地上、地下、全宇宙が、イエス・キリストの下に跪(ひざまづ)いて礼拝し、イエス・キリストは主です』

と告白するためであり、その様にして下さった神様を誉め讃える為でした。

ところで私達も、フィリピ教会員と同じ様に、それ程の愛を受けながら、また、イエス様の手本がありながら、その様になれない罪深い者です。それはやはり、わたし達は、パウロほどに、イエス・キリストの謙卑が分かっていないからでしょう。わたし達はイエス・キリストに救われた事の偉大さも、教会に連なっている事の祝福も、与えられる霊的成長も、軽んじていないでしょうか。わたし達はいま一度、イエス・キリストの御救いに与った時の喜び、キリストによる励まし、愛の慰め、霊による交わりに生かされ、常にキリストの謙卑に心を向け、繰り返し、くりかえし、十

字架を仰ぎ、聖霊によって遜りをあたえられて、教会の一致を保ち、

『イエス・キリストこそ真の救い主、真の主である』

と述べ伝えると共に、キリストの愛を現していく教会に成長して行きたいものです。

その為に、心を一つにして、聖霊の支配と導きを求めて参りましょう。大切なことは、何があっても教会という信仰共同体に止まり続けることです。なぜなら、そこが天国の門だからです。互いに愛し合い、赦し合いながら命の道を歩んで参りましょう。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

神様の御心に背き、滅びへの道を歩んでいたわたし達を、イエス・キリストの御救いに招き、教会に連なる者として下さった御愛に感謝致します。

この恵に答え、わたし達は主にあって一致し、聖霊の導きに従って、教会を建て上げて行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。